

犬山市の歴史と犬山頭首工

— 愛知県犬山市 —

(株) 三祐コンサルタンツ 上大川 渉 太

1. はじめに

犬山城は天文6（1537）年、織田信長の叔父織田信康により築かれたといわれています。木曽川沿いの小高い山の上に建てられた「後堅固（うしろけんご）の城」で、以後、中仙道と木曽街道に通じ、木曽川による交易、政治、経済の要衝として、戦国時代の攻防の要となりました。

また、表紙写真のモデルとなりました犬山頭首工は、従来河道の変動や土砂の堆積により不安定な取水を強いられてきた宮田・木津（左岸）および羽島（右岸）の3用水の共同取水工を建造すべく、昭和34年に国営濃尾用水土地改良事業の一環として建造されました。

本号のCover Historyでは、この2つの建造物の歴史を軸とし、犬山の歴史について概説いたします。

2. 犬山城の歴史

前述のとおり、犬山城は1537年に織田信長の叔父織田信康により築かれました。犬山城最初の城主は織田信康で、その後織田家家臣池田恒興、三好吉房などの城主を経て、犬山城最後の城主とつながる成瀬家の城主へと移り変わります。

戦においては、その背後を断崖に守られた典型的な後堅固の城として、強固な守りを誇っていましたが（写真-1, 2）、天正12（1584）年、織田信長亡き後の後継者争いを発端とする小牧・長久手の戦いにて、池田恒興に攻略されました。攻略の方法も木曽川を渡り背後から奇襲をかけるといったもので、自信を持っていた背後の守りを奇襲により崩された格好となりました。

交易・経済の面においては、木曽川と中仙道に通じる城、城下町として栄え、交通・交易の要衝となりました。

明治時代以降では、明治4年に廃藩置県により天主以外のほとんどの構造物が取り壊され、また明治24年濃尾大地震により、その天主も半壊するなどの被害を受けましたが、後に城主となる成瀬家と犬山市民の尽力により、無事復興しました。復興後、昭和10年に国宝に指定され、現存12天守のひとつとして犬山市のシンボルとなっています。



写真-1 犬山城と木曽川

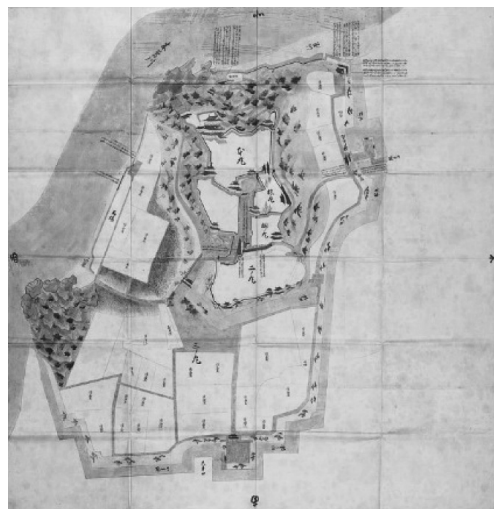


写真-2 張国犬山城絵図（寛文9（1669）年頃、犬山城白帝文庫蔵）¹⁾

3. 犬山頭首工の歴史

日本第2位の平野である濃尾平野（写真-3）は、岐阜県（美濃）南西部から愛知県（尾張）北西部と三重県北東部の一部にかけて広がる沖積平野で、その土壌は非常に肥沃です。その肥沃な土壌を生かし、濃尾平野では従来から、稲作を中心とした農業が営まれてきましたが、濃尾平野の北東部で少し高台となっている地域では、川の水を利用することに苦心していました。それらの地域の農地を潤すべく、木曽川を水源とする宮田・木津（左岸）および羽島（右岸）の3用水



写真-3 犬山市と濃尾平野の位置

が建設されました。しかし、これら用水の取水口は犬山扇状地上に位置しており、河道の変動や土砂の堆積により不安定な取水を強いられてきました。

明治時代以降になってわが国が急速に近代化の途を進むに連れて、木曽川上流のダム開発や下流での砂利乱掘の結果、木曽川の下流部は河床の低下が著しく進行していきました。各用水は、元枳（もといら）の移設・導流堤の延長などの対策を繰り返してきました。加えて水路自体も老朽化が進み、各用水の維持管理費は毎年膨大なものになっていました。こうした事態を解決し、併せて恒久的な農業用水を確保するため昭和

32年より事業費約52億円を投じて「国営濃尾用水土地改良事業」（第一期）が実施されました。

昭和37年、犬山城下に3用水を合口した犬山頭首工が完成し、併せて幹線水路総延長約43kmの改良が行われたことにより、実に300年以上の歳月を経て安定した用水が供給されることとなりました。

4. 2つの建造物と犬山城下の発展

以上述べてきましたとおり、犬山城下は木曽川を利用した交易や商業、また木曽川を水源とした農業を軸に発展してきました。また犬山城そのものも、その背後を木曽川に守られ、さまざまな被害を受けながらも現在まで現存していることより、木曽川の発展と犬山城、その城下の発展は一体不可分であることがわかります。犬山頭首工はその木曽川に雄大に湛えられている水を犬山の発展に活用すべく建造され、本頭首工に堰き止められた用水は今なお、犬山の地を潤しています。犬山城はこの先も、犬山頭首工によって潤され発展していく城下を見守っていきます。

引用・参考文献

- 1) 国宝犬山城：お城について, <http://inuyama-castle.jp/>
- 2) 東海農政局：犬山頭首工の概要, <http://www.maff.go.jp/tokai/noson/kisocho/inuyama/overview.html>
- 3) 東海農政局：濃尾平野の成り立ち, <http://www.maff.go.jp/tokai/seibi/kensetu/kisocyou/pdf/noubiheiya.pdf>

水土を拓く 一知の連環一

企画・編集 農業農村工学会「水土を拓く」編集委員会

発行 農山漁村文化協会

学会は「農業土木学会」から「農業農村工学会」への名称変更に先立ち、ビジョン「新たな〈水土の知〉の定礎に向けて」を策定しました。本書はこの〈水土の知〉を古代国家成立（飛鳥時代）から近代までの歴史的歩みを軸に、各地の農業の展開と国土の開発について、地域固有の水・土・里を「見きわめる」「使い尽くす」「見定める」「大事にする」「見直す」「見通す」「仲良くする」という7つの視点から整理し、これからの農業農村工学のあり方を探るものです。学会誌創立80周年記念出版事業として刊行されました。

体 裁：B5判 360ページ 上製
定 価：4,628円（税込・送料学会負担）
会員特価：4,114円（税込・送料学会負担）

申込先：公益社団法人 農業農村工学会
FAX：03-3435-8494 E-mail：suido@jsidre.or.jp
学会ホームページ：<http://www.jsidre.or.jp/>